山口県埋蔵文化財調査報告　第168集

上ノ山遺跡

1994

財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会

(写真) ＳＢ７　竈周辺の土器

序

山口県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が進められています。

私たちの郷土山口を築いてきた先人の永い営みを今に伝える歴史的遺産を、こうした開発工事との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成５年度は、美祢市於福に所在する上ノ山遺跡の発掘調査を実施し、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、数多くの貴重な手掛かりを得ることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、広く文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として活用されることを願うものであります。

終わりに、発掘調査の実施に当たってご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

財団法人山口県教育財団

理事長　**高浜　哲**

山口県教育委員会

教育長　**高浜　哲**

例　言

1．本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成５年度に実施した上ノ山遺跡（山口県美祢市於福町下地内）の発掘調査概要報告書である。

2．調査は財団法人山口県教育財団事務局指導主事中野達之・山本義信、山口県埋蔵文化財センター文化財専門員谷口哲一が担当した。

3．調査にあたっては、山口県農林部耕地課・山口県山口土地改良事務所・美祢市教育委員会・於福土地改良区並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

4．本書の第１図は国土地理院発行２万５千分の１地形図「於福」を使用した。第２図は山口土地改良事務所提供のものである。

5．本書に使用した方位は、国土座標の北で示し、標高は海抜標高である。

6．図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

7．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

　　ＳＢ：住居跡、建物跡　ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴　ＳＸ：不明遺構

8．本書の実測図・図版は調査員が作成した。また、編集及び執筆は谷口が行った。

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の経緯と概要 …… 2

Ⅲ　遺　構 …… 4

Ⅳ　遺　物 …… 11

Ⅴ　まとめ …… 18

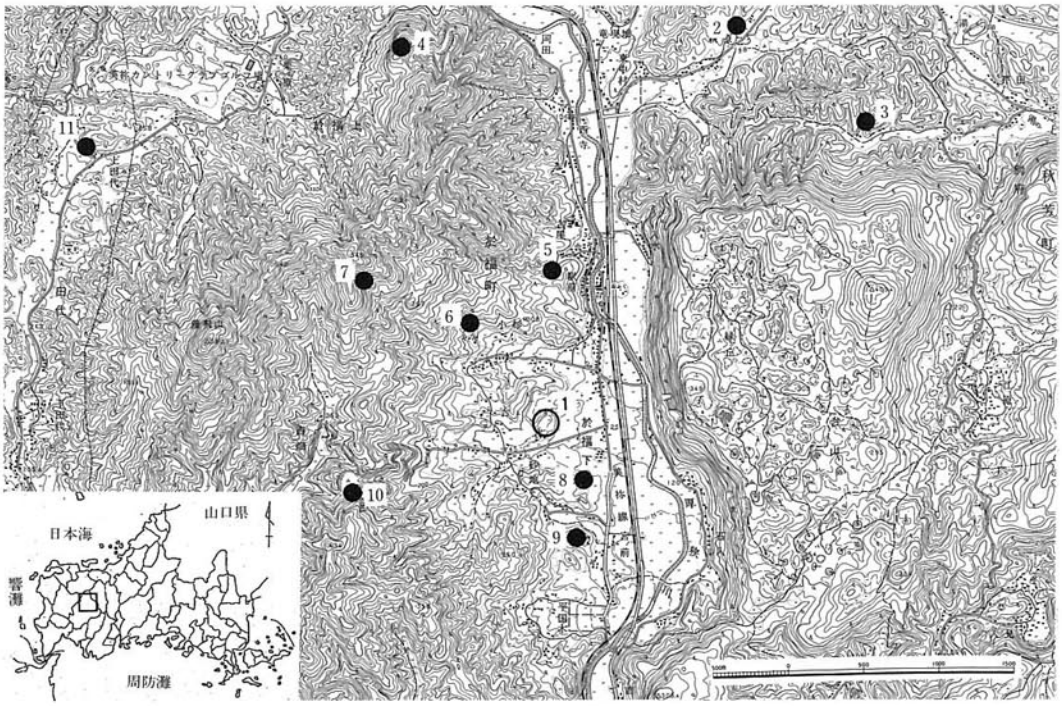
Ⅰ　遺跡の位置と環境

上ノ山遺跡は美祢市於福町下地内に位置する。於福は山口県西部の内陸を南北に流れる厚狭川の上流に開けた沖積低地である。遺跡は於福の西、雁飛山から東に派生した標高約140ｍ、比高約20ｍの緩やかな丘陵の上に発見された（第１図）。

於福の歴史には２つの特徴があげられる。まずこの地は古くから地理的に山陽と山陰側を結ぶ重要な連絡路であり、古代律令下には意福駅屋が置かれるなど、交通の要衝であった。このことは砂地岡遺跡（弥生時代）出土の細形銅剣片や九州系、東部瀬戸内系の土器からもわかるように、恵まれた地理的環境をもとに活発な他地域との交流を通して、有力な集落があったことを物語るものである。こうした他地域の影響を受けながら定着し発展した於福のムラは、古墳時代以降時代の流れと共に盛衰を繰り返しながら、駅屋が置かれる交通・社会的基盤をつくりあげたといえる。於福南辺にある宮ノ前古墳群（横穴式石室）はそうした古墳時代後期のある時期、ムラを掌握し統率した首長の墓であろう。

次に銅との関連が指摘できよう。地内には鉱山がいくつか知られ、「おふく」の地名も銅に由来したものとみられている。砂地岡遺跡でも多量の鉱滓などから中世初めの銅精錬が指摘され、今回の上ノ山遺跡調査でもさらに古い古代の金属生産を窺わせる遺構も発見されている。

このように古代から於福の歴史には、交通の重要な拠点という地理的環境と、産出される銅とその生産が大きな影響と役割を果たし、それは中世以降も続くことになる。



1　**上ノ山遺跡**　2　萩原遺跡　3　芹田銅山跡　4　田代山城跡　5　於福金山銅山跡　6　永福寺跡　7　於福赤道山(山上)銅山跡
8　砂地岡遺跡　9　宮ノ前古墳群　10　於福(大和)銅山跡　11　上田代遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

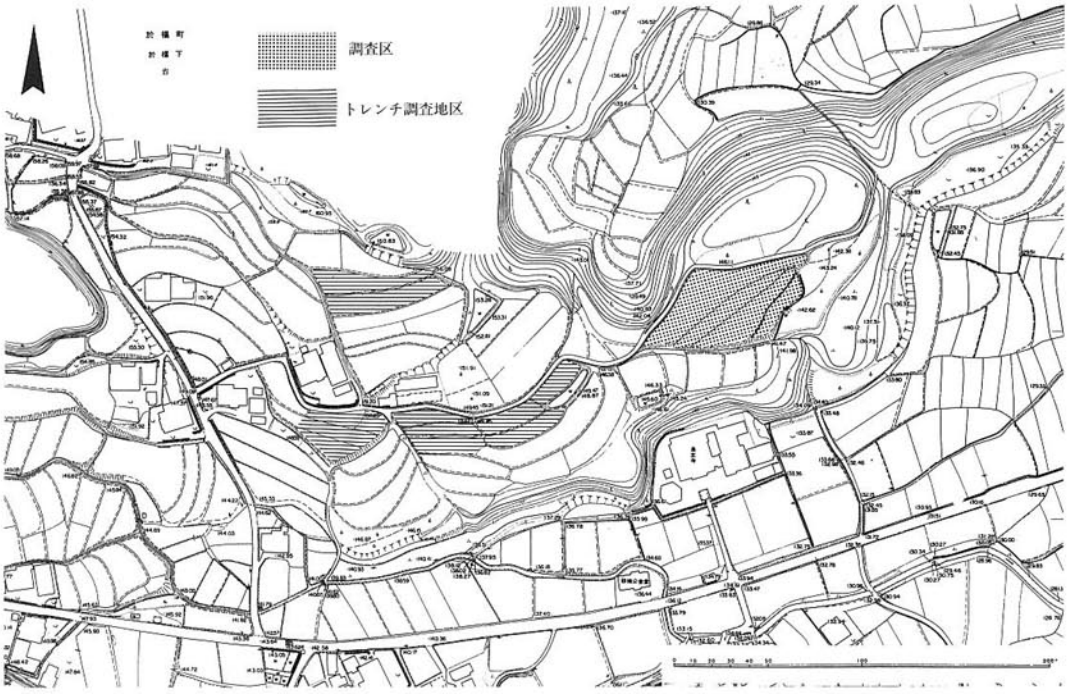
II　調査の経緯と概要

山口県教育委員会では農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の保護を図るため、山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存が難しい遺跡については記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施してきた。調査は財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて、これら両機関が合同で行うものである。美祢市於福地区では平成４年度に砂地岡遺跡を調査し、平成５年度は上ノ山遺跡が調査対象となった。

上ノ山遺跡の発掘調査は平成５年４月15日から開始した。調査対象地区は工法上削平される箇所の内、事前調査で遺構の確認された丘陵先端部は全面発掘調査を行い、それ以外はトレンチ調査で遺構遺物の確認を行うこととなった（第２図）。調査面積は2500㎡である。

トレンチ調査地区では、耕土下に弥生土器、土師器、須恵器、鉱滓を多数出土する遺物包含層と、黄褐色粘質土の地山を掘り込んだ方形の竪穴住居跡を確認した。これにより上ノ山遺跡のある丘陵南斜面一帯で、弥生時代以降人々の生業活動が展開していたことが明かとなった。

この結果を踏まえて丘陵先端部の全面調査を実施した。調査区は標高143～145ｍで、丘陵項部南側を掘削して４段の田としていた。そのため調査区北側（項部側）では後世の削平を受けており、遺構は希薄であった。南低位側は厚く包含層が堆積し、土器と共に鉱滓も多数出土した。包含層を除去後遺構の検出をしたところ、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡３棟、土坑、柱穴が発見された。これらは各遺構ごとに慎重に掘り出され、逐次写真、図面等の記録を取りながら調査を進めた。また調査期間中の７月31日には現地説明会を開き一般の方々に遺跡を公開した。このようにして８月19日までに全ての作業を完了し、現地調査を終了した。



第２図　調査範囲図

(アミかけ部　SX)

第3図　遺構配置図

Ⅲ　遺　　構

上ノ山遺跡から発見された遺構は、竪穴住居跡（ＳＢ）26軒、掘立柱建物跡（ＳＢ）３棟、土坑（ＳＫ）、多数の柱穴（ＳＰ）及びＳＸである。これらの遺構は後世の開墾にともない、上面を削平され、当時の規模からみれば浅いものとなっている。特に調査区北側はかなり削り取られ、遺構の密度が希薄である。現地形からみれば北側の丘陵頂部にかけて住居跡等の遺構が埋存している可能性が高い。

以下、各遺構を概観し代表的なものを取り上げる。

1　竪穴住居

検出された26軒の竪穴住居は、円形５軒、方形21軒である。このうちＳＢ21・26は竈の焚き口部焼土と石製支脚が残存したのみであるが、方形住居として取り扱う。

円形住居は、径約７ｍ、主柱は７～８本、住居中央に土坑を持つ。いずれも上面の削平が著しく、壁面が残るものは少ない。ＳＢ２・３、５・６はほぼ位置が重複しているため、住居の建て替えを行っているとみられる。時期は弥生時代中期後半。

竪穴住居跡一覧表　　（　　）は推定値

住居番号	平面形	規模(cm) 東西	規模(cm) 南北	規模(cm) 壁	床面積(m²)	主柱	軸方位	竈(cm) 主軸方向	竈(cm) 煙道長	竈(cm) 袖石	竈(cm) 備考	主な出土遺物	備考	時期
1	円形	265		15		(2)	N65°E	北東		○		土師器　須恵器	南半部消失	Ⅲ
2	円形	(720)	(720)			7						弥生土器片	柱穴のみ残存	Ⅰ
3	円形	(730)	(750)			8						弥生土器片	〃	Ⅰ
4	円形	(720)	(750)			8						弥生土器片	周溝、柱穴残存	Ⅰ
5	円形	730	(740)	22		8						弥生土器　石鏃　紡錘車	ＳＢ６の建て替え　焼土貼り床	Ⅰ
6	円形	600	(720)	24		7						弥生土器片		Ⅰ
7	方形	560	565	40	29	4	N36°W	北西	108	○	石製支脚	土師器　須恵器	竈周辺に多くの土器	Ⅲ(６Ｃ後半)
8	方形	255	300	55	48		N35°E					土師器　焼土		Ⅱ
9	方形	688	824	30	26	4	N26°W	北西	70	○	石製支脚	土師器　須恵器　手捏ね土器　有孔円板　砥石	屋内土坑	Ⅲ(６Ｃ後半)
10	方形	600	570	22	33	4	N52°E	南西	80	○	支脚跡	土師器　須恵器　手捏ね土器	屋内土坑	Ⅲ(６Ｃ末～７Ｃ前半)
11	方形	610	650	25	36	4	N35°W	北西	105	○	石製支脚	土師器　須恵器　手捏ね土器　有孔円板		Ⅲ(７Ｃ前半)
12	方形	290	310	10	9	なし	N52°E							
13	方形	730		8		(4)	N48°W					土師器片　鉄刀子		Ⅱ
14	方形	550	500		21	2	N 3°E					土師器片	ベッド状遺構、屋内土坑	Ⅱ
15	方形	505	660	1	28	4	N 9°E					土師器片　手捏ね土器	屋内土坑	Ⅱ
16	方形	375					N57°E	北西	15	○	石製支脚	土師器　須恵器		Ⅲ(６Ｃ後半)
17	方形	550		3		(4)	N49°W	北西	35		石製支脚	土師器　須恵器		Ⅲ
18	方形	(620)	610	3		4	N 2°W					土師器　手捏ね土器	ベッド状遺構　屋内土坑	Ⅱ
19	方形	(425)	(370)	1	15	2	N 5°E					土師器	ベッド状遺構　屋内土坑	Ⅱ
20	方形	(510)	490	2		4	N 2°E					土師器	中央土坑	Ⅱ
21	方形							北西			カマド焼土のみ	土師器　須恵器	竈焼土のみ残存	Ⅲ(６Ｃ末～７Ｃ前半)
22	方形							北東			土製支脚	土師器	竈のみ残存	Ⅲ
23	方形	690	690	40	39	4	N55°E					土師器　紡錘車	ベッド状遺構　中央土坑　屋内土坑　焼土　炭化材	Ⅱ
24	方形	440		11		(2)	N45°E	北西	90	○	土製支脚	土師器	中央土坑　竈対面土坑	Ⅲ
25	方形	350		8			N60°E						北西竈？　周溝のみ	Ⅲ
26	方形							北東			石製支脚	土師器	支脚・焼土のみ残存	Ⅲ

Ⅰ期　弥生時代中期後半　Ⅱ期　古墳時代前期(庄内式から布留式併行期にかけて)
Ⅲ期　古墳時代後期(６世紀後半～７世紀前半)

方形住居は２時期に分けられる。まず古墳時代前期（庄内式～布留式併行期にかけて）の住居は８軒。一辺４～７ｍ、床面積15～39㎡と規模に差がある。主柱は２または４本。屋内にはベッド状遺構を巡らし、その形態もバラエティーがある。また屋内には中央部以外に住居壁際に土坑（屋内土坑）を設ける例が多い。

６世紀後半～７世紀前半の方形住居は12軒。一辺５～８ｍで、平面形は長方形が多い。床面積は26～36㎡。主柱は４本で、住居の一方に竈を設置する。また竈の対面に位置する住居壁際に土坑を持つ（竈対面土坑）例もある。竈内外からは土師器・須恵器が多く出土した。

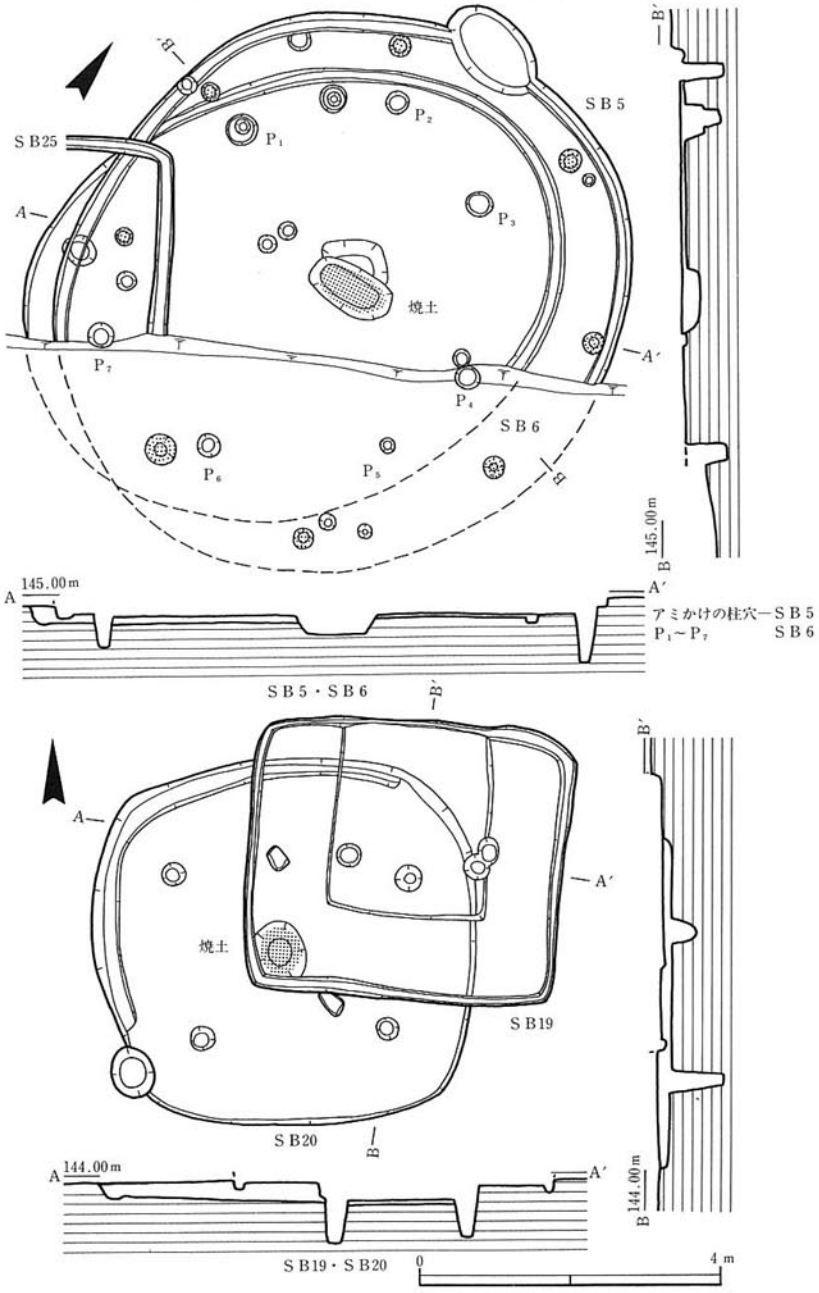
ＳＢ５・６（第４図）

ＳＢ５・６とも南北に長い長円形の住居。いずれも南半部は削平のため柱穴のみ残存。２つの住居は位置的に重複するので建て替え住居であろう。

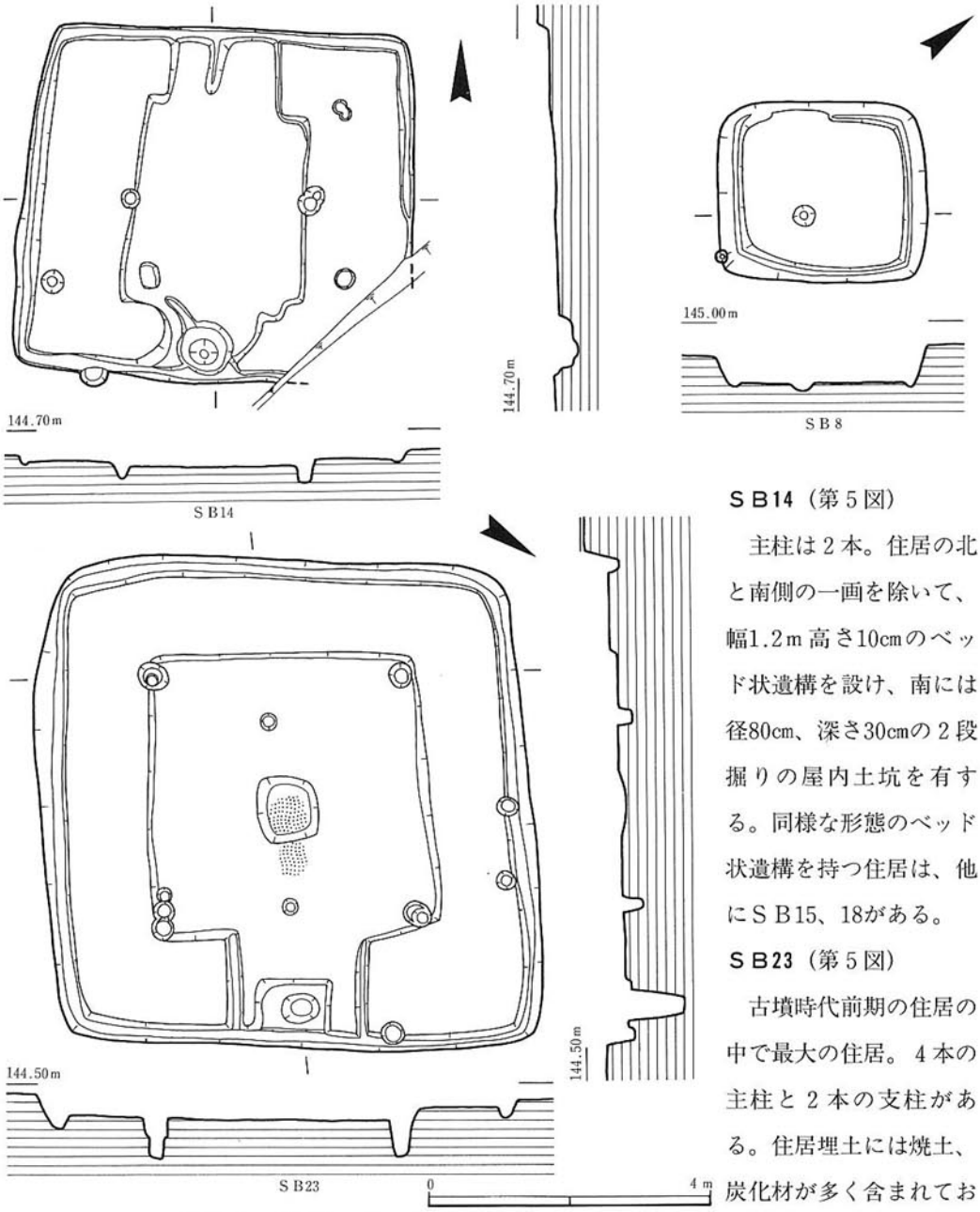
土層観察からＳＢ６の埋土中には焼土、炭化材が多く含まれていたのでＳＢ６が焼失したのち新たな住居の床面を作り、壁を拡張してＳＢ５を立て直したと考えられる。

ＳＢ19・20（第４図）

隅丸方形のＳＢ20が廃絶後、ＳＢ19の方形住居がつくられる。ＳＢ20は中央に焼土や炭化物が堆積した土坑を持ち、北から西にかけての壁面に部的に周溝を巡らす。ＳＢ19は住居の壁に沿って溝が巡り、幅80cmのベッド状遺構を「コ」の字状に設けていた。



第４図　ＳＢ５・６　ＳＢ19・20実測図



第5図　ＳＢ８・14・23実測図

ＳＢ14（第５図）

主柱は２本。住居の北と南側の一画を除いて、幅1.2ｍ高さ10cmのベッド状遺構を設け、南には径80cm、深さ30cmの２段掘りの屋内土坑を有する。同様な形態のベッド状遺構を持つ住居は、他にＳＢ15、18がある。

ＳＢ23（第５図）

古墳時代前期の住居の中で最大の住居。４本の主柱と２本の支柱がある。住居埋土には焼土、炭化材が多く含まれており、多量の土器も破棄された状態で出土した。おそらく火災による住居廃絶がありその後土器などの捨て場になったと考えられる。幅1.1ｍ、高さ20cmのベッド状遺構を屋内土坑のある東側一部を除いて、住居内に巡らしている。屋内土坑は径50cm、深さ80cm。土坑の周囲には板などで蓋ができるように方形のわずかな段差と浅い溝が検出された。土坑内からは何も出土しなかったが、上面からは第11図土器16、20が出土した。

ＳＢ８（第５図）

一辺３ｍ以内の大きさであるが、周溝を持つことから住居と判断した。規模や構造から一般

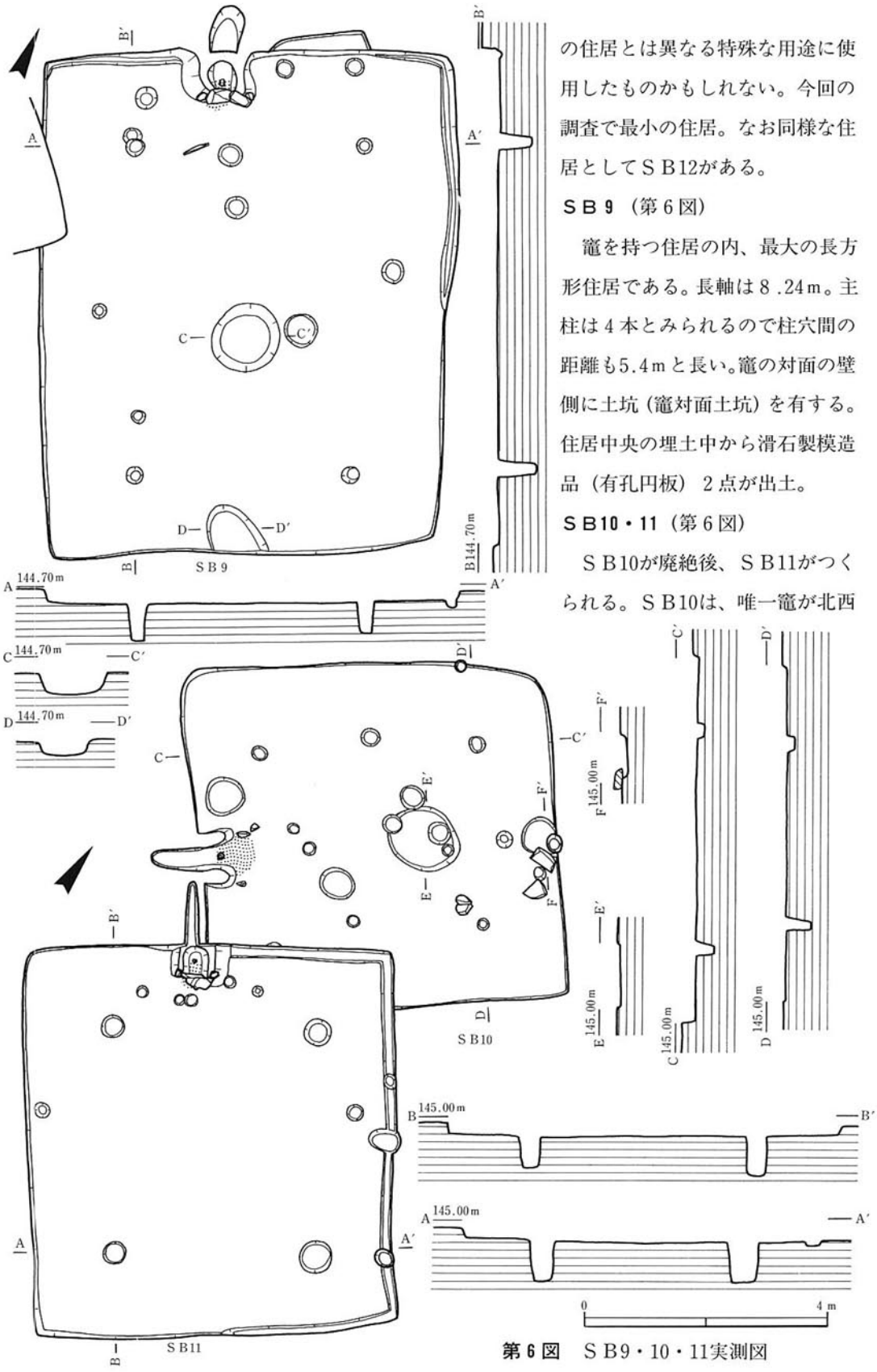
の住居とは異なる特殊な用途に使用したものかもしれない。今回の調査で最小の住居。なお同様な住居としてＳＢ12がある。

ＳＢ９（第６図）

竈を持つ住居の内、最大の長方形住居である。長軸は８.24ｍ。主柱は４本とみられるので柱穴間の距離も5.4ｍと長い。竈の対面の壁側に土坑（竈対面土坑）を有する。住居中央の埋土中から滑石製模造品（有孔円板）２点が出土。

ＳＢ10・11（第６図）

ＳＢ10が廃絶後、ＳＢ11がつくられる。ＳＢ10は、唯一竈が北西

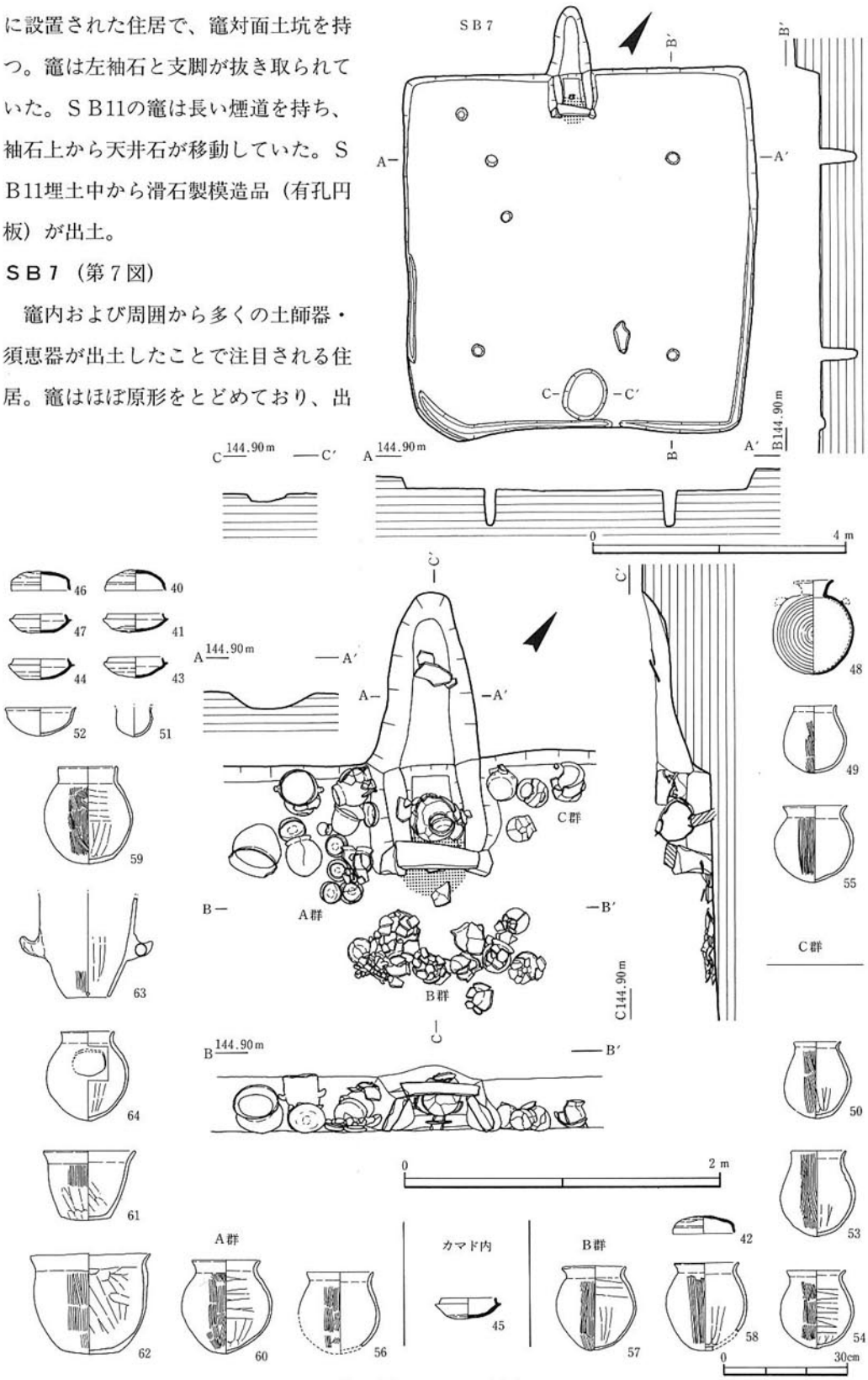


第６図　ＳＢ9・10・11実測図

に設置された住居で、竈対面土坑を持つ。竈は左袖石と支脚が抜き取られていた。ＳＢ11の竈は長い煙道を持ち、袖石上から天井石が移動していた。ＳＢ11埋土中から滑石製模造品（有孔円板）が出土。

ＳＢ７（第７図）

竈内および周囲から多くの土師器・須恵器が出土したことで注目される住居。竈はほぼ原形をとどめており、出

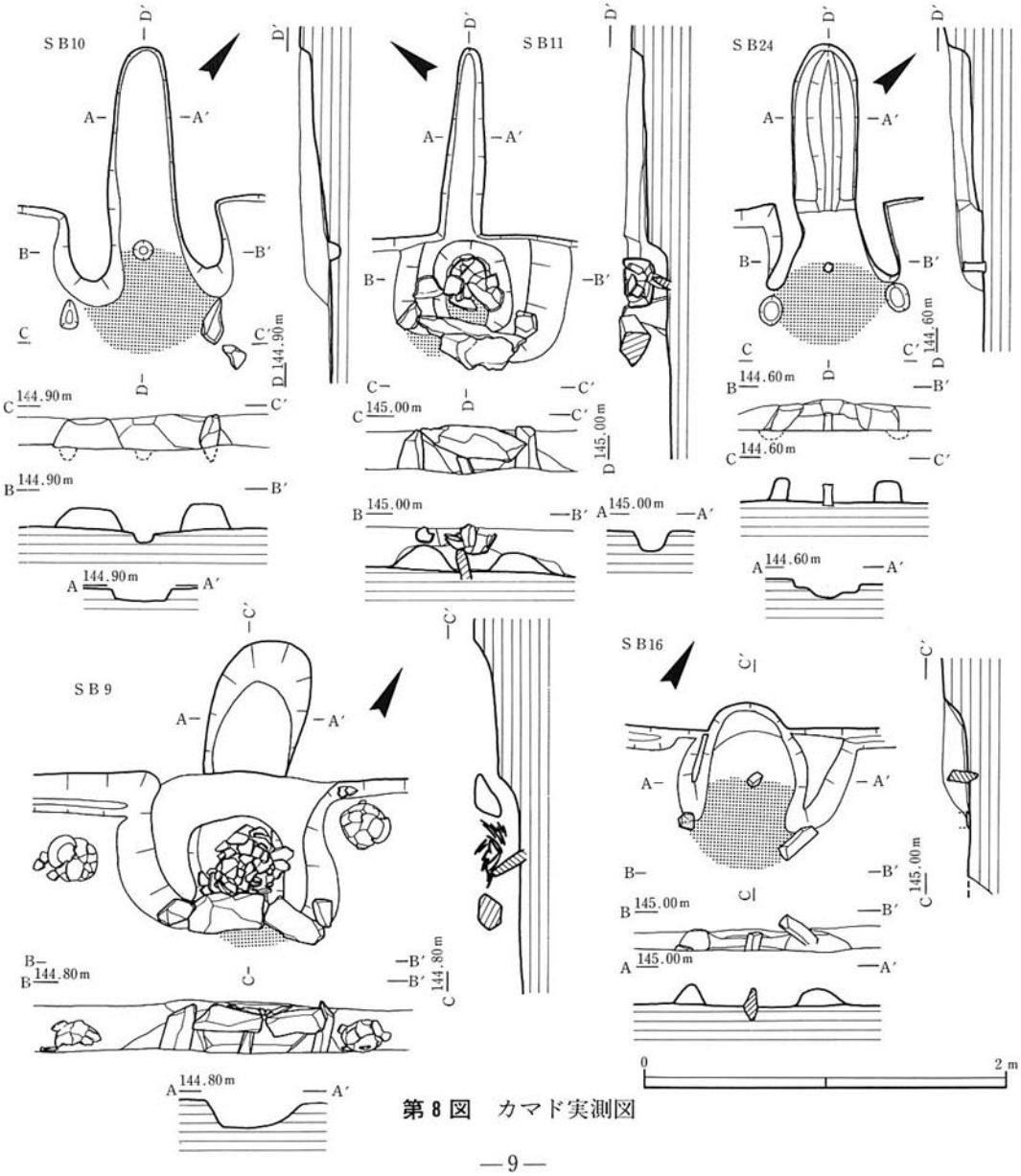


第７図　ＳＢ７実測図

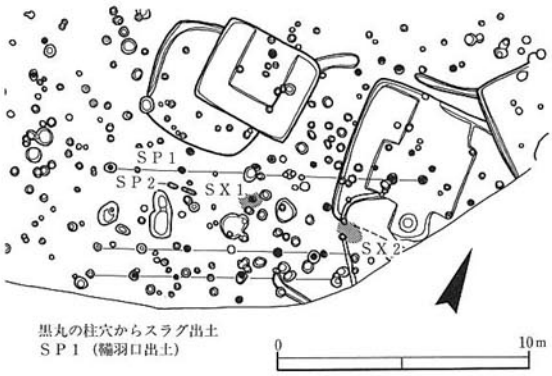
土した土器群は、竈に対して左側（A群）、正面（B群）、右側（C群）と竈内の４グループに分けられる。これらは土師器21点、須恵器９点の30点が、据えられた状態で出土した（なお掲載した土器実測図は復元可能なものを取り上げた）。このうち胴部に孔を持つ甕（第14図64）の上に据えられた甑（63）や、竈内の口縁部の欠けた甕の上に置かれた須恵器坏（45）など、その出土状態が注目される。竈祭祀や土器の使用状態を考える上で貴重な資料である。

竈について（第８図）

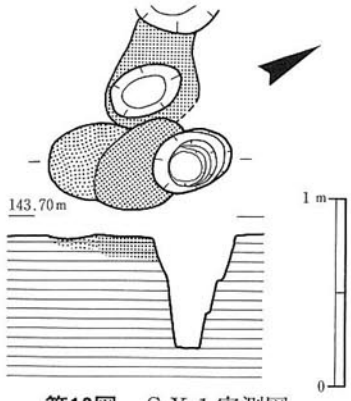
今回の調査では10基の竈を確認した。原形をとどめる竈はほとんどないが、典型的な構造は黄褐色の粘質土で両袖部をつくり、焚き口部には袖石の上に天井石を置き、内部には支脚（石製６、土製２）を据えていたとみられる。ＳＢ７・９・11では支脚の上に甕を置いたままの状態で出土し、使用状況を把握できる例もある。竈は住居廃棄時に意図的に破壊されることが多



第８図　カマド実測図



第９図　ＳＸ１と周辺遺構



第10図　ＳＸ１実測図

いが、上ノ山遺跡でも天井石を折損したり、移動させたもの（ＳＢ９・10・11)、袖石、支脚を抜き取ったもの（ＳＢ16・10・17・24）などがある。また竈内に須恵器を置いたり（ＳＢ７・16)、支脚に土師器椀を伏せた例（ＳＢ26)、さらにはＳＢ７にみられるように大量の土器を竈周辺に集中させるなど竈に対するさまざまな祭祀が行われたことが窺える。

なお竈の設置方向は、北西６、北東３、南西１である。方向が一定でないのは、当地方の風向きや地形、さらには集落内での住居の位置などを配慮して、その方向が決められるためであろう。

2　掘立柱建物跡

２間×１間の建物跡を３棟（ＳＢ27～29）復元できた。いずれも棟方向はほぼ東西を向き、規模は桁行4.4～4.6ｍ、梁行2.3～3.2ｍ。時期は柱穴からの出土遺物がないため不明であるが、他に中世の遺物がほとんどないことから、竪穴住居群に併存する可能性がある。

3　土坑

約30基の土坑を検出した。平面形から円形、長方形、不整形に分けられ、大きさは１ｍ前後のものが最も多い。いずれも30cm以下の浅い土坑で、遺物はほとんどみあたらない。

4　ＳＸ（第９・10図）

今回の調査では、地山面に径30～80cmの焼土の広がりをいくつか検出した。ここではこの焼土坑をＳＸとして取り上げる。このうち30cm前後の焼土面で、焼土が軟質であるものは、竈焚き口部などの住居に関連した焼土が残存したものとみられる。一方第10図に掲載したＳＸ１は焼土範囲が広く、わずかながら断面が皿状をなす。さらに焼土も硬質で地山面深くまで焼けしまっていることから、炉跡の一部とみられる。ＳＸ１周辺（第９図）の地山面や柱穴からは多くのスラグ、木炭塊、緑青をふいた風化した銅石、鞴の羽口（ＳＰ１出土）などが集中して出土していることからも、その可能性は高いと考えられる。なおスラグ出土の柱穴を含めた周辺の柱穴の位置から、この炉跡を囲む柵または覆屋があったことも想定できるであろう。これらの時期については、スラグに伴出した須恵器片（第15図75～77）からおおむね８世紀代であると考える。

Ⅳ 遺　　物

上ノ山遺跡から出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器の土器類、土製品、石器、石製品、金属製品がある。このうち竪穴住居跡からは、土師器、須恵器がまとまって出土し、良好な資料が得られた。以下、土器、土製品については遺構ごとに主たるものを取り上げ、その他の遺物についてはまとめて紹介する。

ＳＢ５（第11図　１・２）

１は上面に円形浮文を持つ鋤形をした壷口縁部。２は甕。口縁端部に沈線を２条ほど凹線状に施す。頸部にも沈線あり。外面ハケメ調整。

ＳＢ19（３・４）

３は脚付き鉢の脚部か。４は山陰系土器の甕口縁部。明瞭な屈曲部を持ち、端部は尖り気味。

ＳＢ20（５～７）

５は丸底の小型鉢。６は複合口縁の壷。口縁は屈曲部からほぼ垂直に立ち上がり、端部は平坦な面を持つ。ハケメ調整残る。７は底部を欠損するが、上げ底の低い脚を有する台付き鉢とみられる。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。

ＳＢ23（８～26）

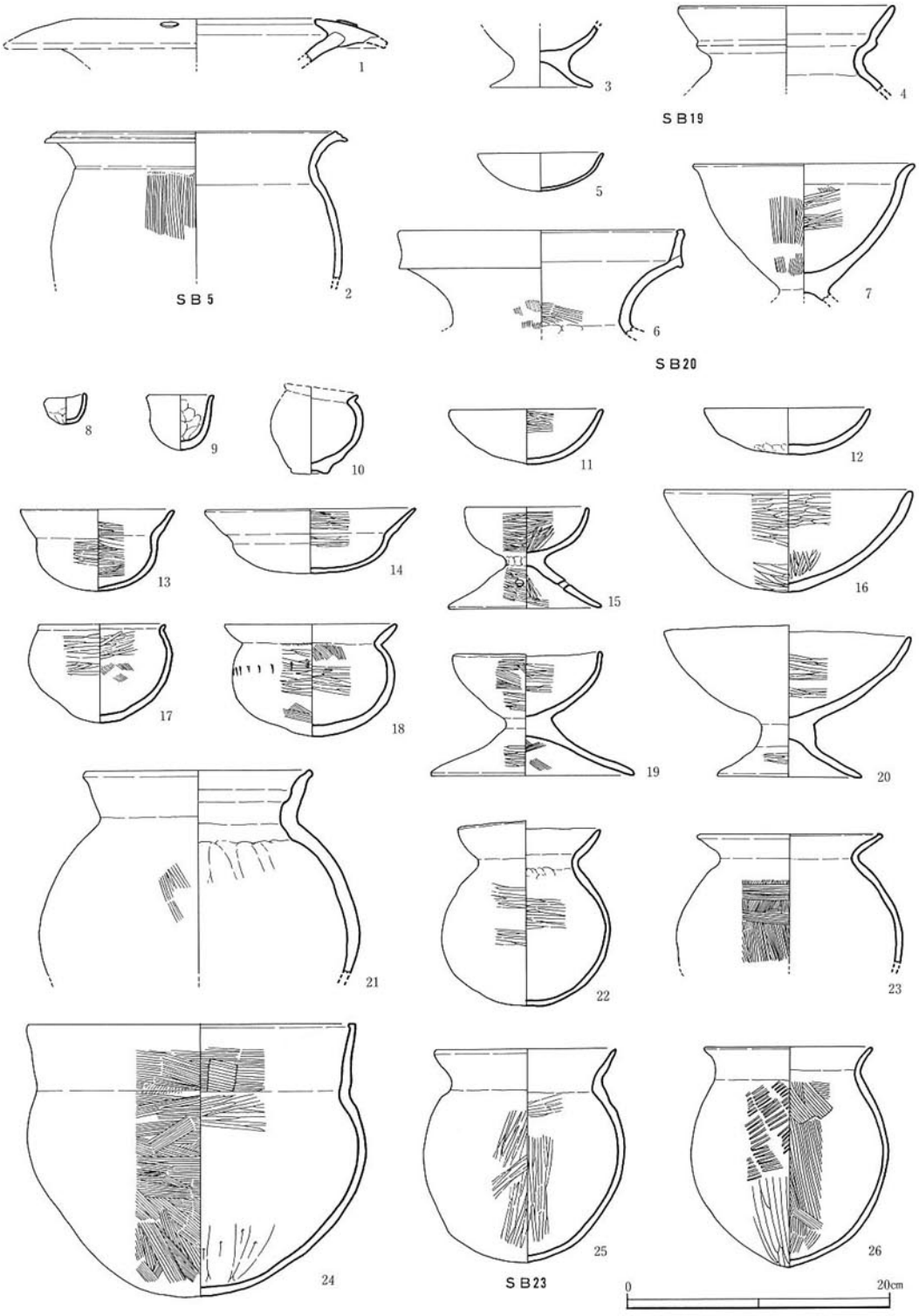
ＳＢ23からは多量の土器片が破棄された状態で出土した。ここではそのうちの代表的なものを取り上げる。８～10は手捏ね土器。10は短い口縁部と小さな底部があり、壷型であろう。11・12は口径に対して浅い丸底の鉢。ミガキ調整。16は大型の鉢。厚手で内外面にミガキ調整。13・14は丸底で半球状または皿状の体部に大きく外傾する口縁部を持つ精製された鉢。内外面丁寧なミガキ調整を施す。17・18はやや尖り気味の丸底と偏球形の体部に短い口縁がつく鉢。18は外面に刺突文がある。内外面はハケメ調整後、ミガキ調整。15・19・20は低脚の高坏。15・19は小型の椀型の坏部に、大きく広がるな脚部を持つ。15は透かし穴あり。丁寧なミガキ調整。20は16と同様な大型鉢に脚部がつくもの。ミガキ調整。22は偏球形の体部に内弯気味に外傾する口縁を持つ。内外面ミガキ調整。21は壷。厚手で、ゆるく屈曲する短い口縁は、内面のわずかな凹みと端部に特徴がある。23・25・26は小型の甕。23はくの字状の口縁で端部を上方にわずかにつまみ上げる。体部外面に縦方向ののち横方向のハケメ調整を施す。25・26の口縁はゆるく屈曲し尖り気味。25は内外面ハケメ調整。26は尖り気味の丸底で、体部外面上半にタタキ調整、下半はミガキ調整。内面はハケメ調整。24は平底にちかい丸底。大きく張る体部から口縁は直立し、端部はわずかに内側に肥厚させ平坦な面を持つ。外面はハケメ調整、内面下半は削り調整。

ＳＢ16（第12図　27・28）

27・28は須恵器坏。27の坏蓋は口径15.4㎝、丸い天井部で、天井部と体部の境に凹線を巡らす。28の坏身は口径13.5㎝で、口径に対して器高が低い。立ち上がり部はわずかに内傾し、内面にわずかに同心円の当て具痕が残る。

ＳＢ９（29～36）

29・30は手捏ね土器。31・32は須恵器坏蓋、坏身。坏蓋は口径15.4cm、体部との境に凹線、



第11図　出土遺物実測図(1)

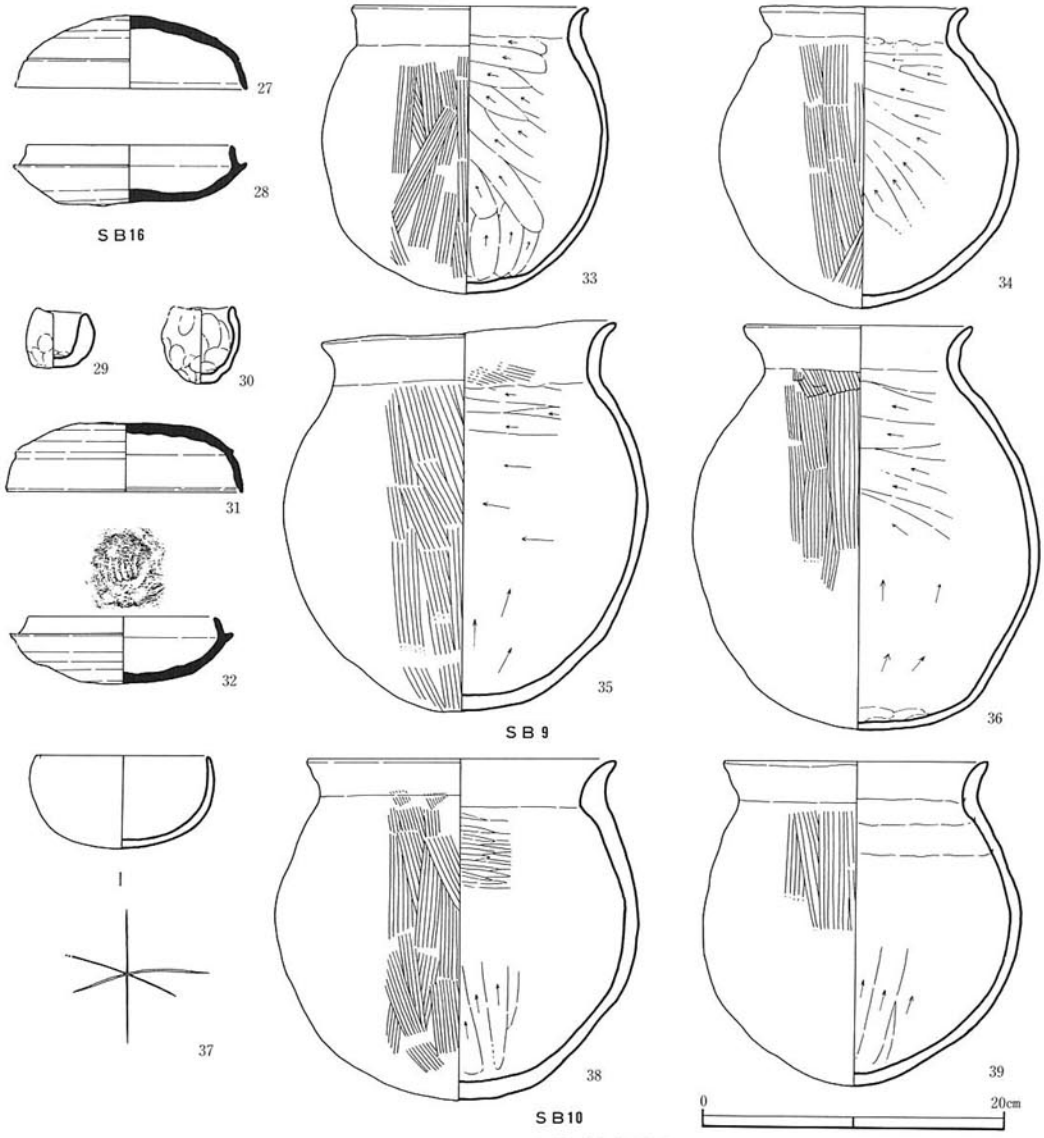
口唇部に段を持つ。坏身は口径12.4cm、内面には同心円の当て具痕が残る。33～36は甕。最大径が中位にある偏球形の体部に、ゆるく外反する口縁を持つ。口径と体部径がさほど変わらない33・35と、大きく張る34と長胴の36がある。外面粗いハケメ調整、内面削り調整。

ＳＢ10（37～39）

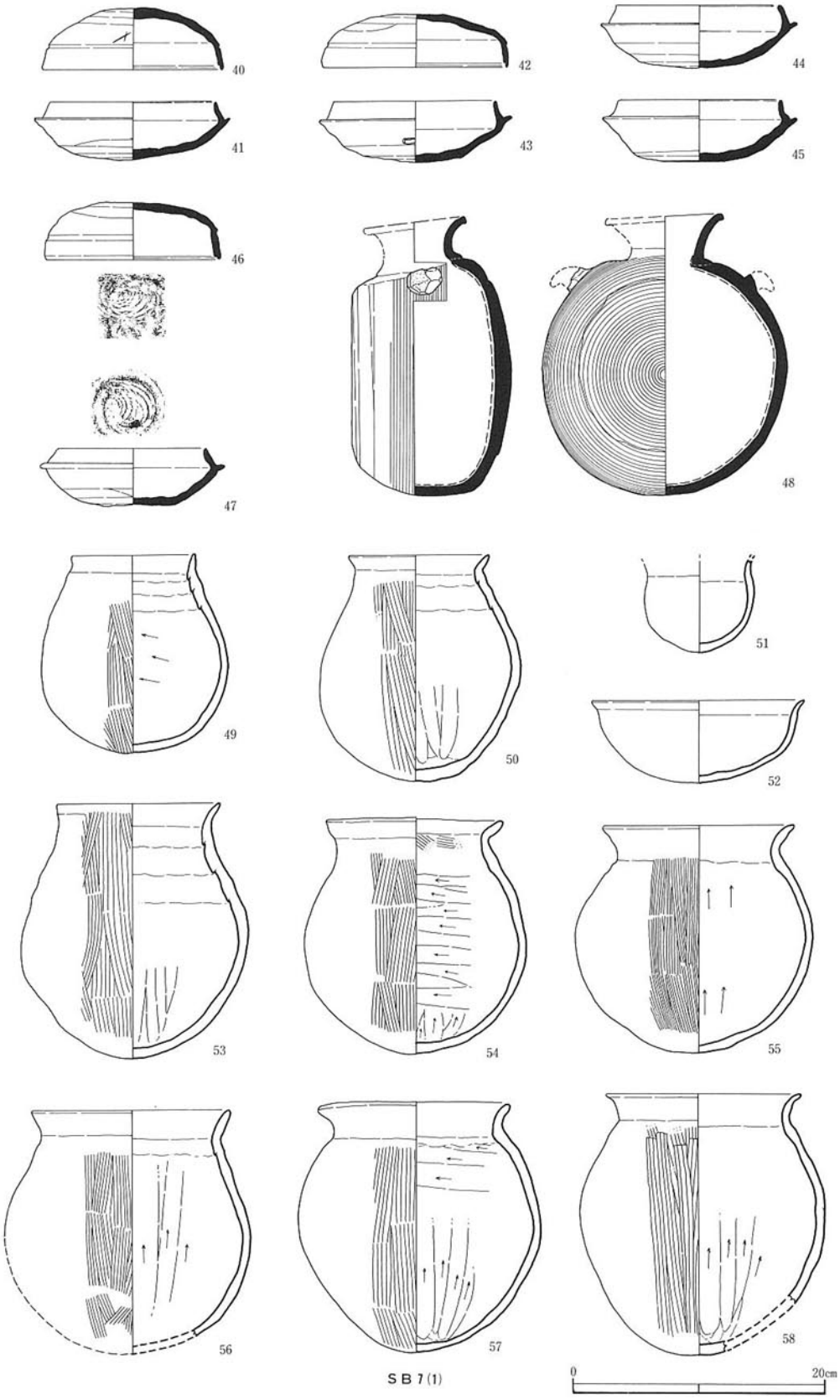
37は椀。ミガキ調整で丁寧なつくり。底部に「米」のヘラ記号がある。38・39は甕。口径より体部径がわずかに大きく、頸部であまり屈曲しない。外面粗いハケメ調整、内面削り調整。

ＳＢ７（40～64）

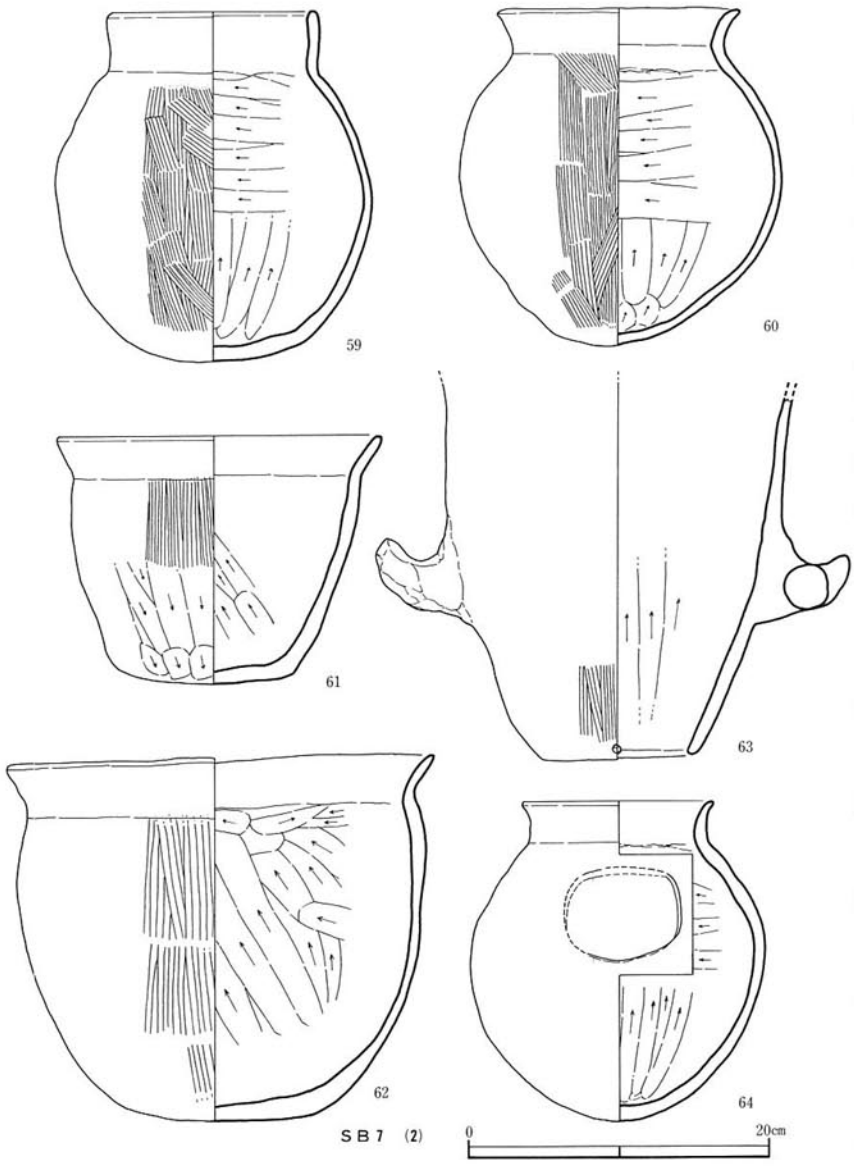
ここでは竈周辺の土器群を取り上げる。なおこれら以外に住居内からは土師器甕、鉢、甑、須恵器坏、壺などの破片が出土した。40～47は須恵器坏身・坏蓋。確実にセット関係にあるのは46・47である。坏蓋は口径14cm前後、器高4.3～4.9cmで、天井部と体部の境に凹線を持ち、



第12図　出土遺物実測図(2)



第13図　出土遺物実測図(3)

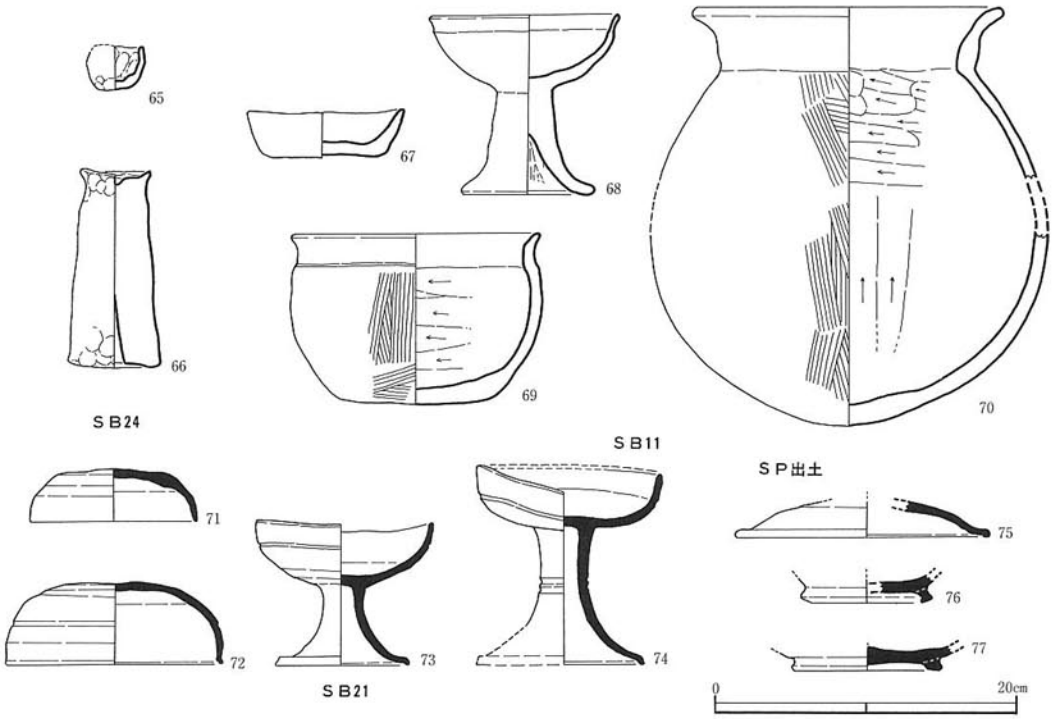


第14図　出土遺物実測図(4)

口唇部には段がみられる。坏身は口径12～13cm、器高4.6～5cmで、立ち上がり部はやや内傾し、口唇部は尖り気味に終わる。43～47の内面には同心円の当て具痕が残されている。48は提瓶。外反する口頸部に、体部は前面が丸く背面は平たい。耳は欠損する。体部前面にはカキ目調整を施し、成形時の粘土円盤の接合面が残る。

出土した土師器のうち、51・52はミガキ調整を施す丁寧な作りで、他の土器と比較して精製された土器である。その他の49・50・53～64は外面粗いハケメ調整、内面削り調整を施し、砂粒を多く含む粗製の土器。外面には竈での使用により二次加熱を受けている。

51は小型の鉢、52は浅い鉢で、口縁が短く外反する。49～60は甕。これらは形態から次のように分類できる。すなわち49・50・53は口径が小さく、下膨れの体部に短く外反する口縁部をもつもの。次に54～58・60は、大きく張り、偏球形または長胴の体部を持ち、口縁部は緩やかに外反するもの。そして平底で、中位で張る体部に直口の口縁である59の3者である。61・62は平底鉢。体部が外傾するもの（61）と、膨らむもの（62）があり、口縁部はわずかにひらく。63は甑。体部中位に牛角状の取っ手をつけ、底部に相対する2つの小孔を持つ。64は体部上半に9×6cmの長方形の窓をつくる甕。焼成前穿孔で、外面には二次加熱痕あり。64の口縁部に



第15図　出土遺物実測図(5)

63を据えた状態で出土したので、両者はセット関係にある。

ＳＢ24（第15図65・66）

65は手捏ね土器。66は土製支脚。長さ13.2cm、径4.8～6.3cmで、下面には突き刺した穴がある。他には土師器甕が出土した。なお土製支脚はＳＢ22からも出土している。

ＳＢ11（67～70）

67は平底で小型の鉢。68は高坏。わずかに裾が広がる脚部に口縁がＳ字状になる坏部を持つ。69は平底で短く外反する口縁を持つ鉢。口縁部と体部の境にわずかな段差がある。70は偏球形の体部にくの字状にまがる口縁を有する甕。全体的に厚手なつくり。他に須恵器片（坏蓋、坏身）が出土した。

ＳＢ21（71～74）

ＳＢ21は住居壁面がほとんど残っていないほど削平されていたが、わずかな埋土の中から次の須恵器が出土した。71・72は蓋。71は口径10.8cmで口縁は尖り気味に終わる。72は口径13.4cm、器高5.5cm。体部と口縁部の境に凹線が巡り、口唇部には段を持つ。73･74は高坏。坏部の外面にはに凹線があり、73は低脚、74は長脚で脚中央に２条の凹線を施す。焼け歪みがみられ、73は赤褐色で胎土が堅緻であることから、還元焔焼成を受けていない赤焼須恵器である。

ＳＰ出土須恵器（75～77）

スラグとともに須恵器片が３点出土した。75は口唇部を鳥嘴状に下垂させ丸くおさめる。76･77は坏で、高台がハの字状につく。

その他の出土遺物（第16・17図）

鞴羽口（78）　推定外径8.5cm、内径３cm。表面は熱のため赤褐色で、外面には成形時の圧痕やナデ調整がみられる。ＳＰ１からスラグとともに出土。

石鏃（79）　平基式の石鏃。長さ２cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm。ＳＢ５出土。安山岩製。

管玉（80）　約２分の１残存。径５mmで両面から穿孔する。ＳＢ５出土。碧玉製。

石製紡錘車（81・82）　81は径5.1cm、厚さ0.35cm。ＳＢ５周溝内から出土。砂岩製。82は径4.3cm、厚さ1.5cm。表面には幅５cmの削り痕が残る。ＳＢ23埋土中出土。滑石製。

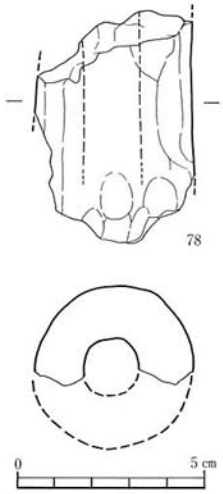
砥石（83）　残存長５cmの小型の砥石で、４面を使用する。ＳＢ９出土。石英斑岩製。

石製模造品（84～86）　滑石製。84・85は有孔円板で、ＳＢ９埋土中出土。84は径3.7～4.1cm、厚さ0.6cm。85は径5.4cm、厚さ0.6cm。表面には斜めの研磨痕残る。86は不整形な円板で、長さ6.5cm、幅6.0cm、厚さ1.0cm。表面は粗い研磨面が残る。ＳＢ11埋土中出土。

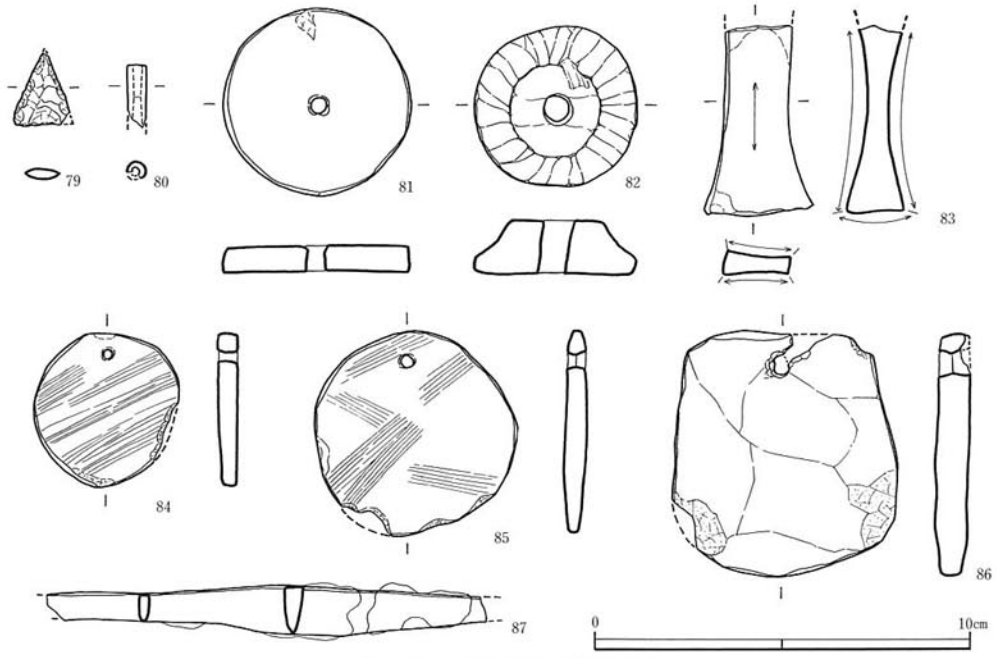
鉄刀子（87）　刃部幅1.3cm、茎部幅0.7cm。ＳＢ13出土。

スラグ　今回の調査では遺物包含層、柱穴内から多くのスラグが出土した。特にＳＸ１周辺の柱穴から多くみられ、中には柱の詰め石のかわりにスラグを充塡したものもあった。スラグについて分析調査は行っていないが、中には銅精錬に関係するスラグもある(注)とみられ、当地における金属生産を裏付けるものとして貴重な資料である。

（注）　社団法人資源・素材学会理事　葉賀七三男氏から助言を得た



第16図　出土遺物実測図(6)



第17図　出土遺物実測図(7)

Ⅴ まとめ

今回の調査の結果、上ノ山遺跡は弥生時代から古代にかけての集落跡が発見された。遺物から弥生時代中期後半、古墳時代前期（庄内式から布留式にかけての時期）、古墳時代後期（6世紀後半から7世紀前半）、8世紀代の4時期にわけることができる。ここでは周辺遺跡の調査成果をふまえて各時期の特徴をまとめてみたい。

上ノ山遺跡で弥生時代の集落が営まれたのは中期後半からのことである。砂地岡遺跡ではすでに前期末から中期初頭には集落が現れ、上ノ山遺跡と同時期にも存続している。砂地岡遺跡より比高が20～30m高い丘陵上にあることから、この時期の集落の発達と、社会状況の成熟から生まれる他集落との政治的緊張状態などによって丘陵上への集落の拡大、分村が行われたと考えられる。

次に古墳時代前期（庄内式から布留式併行期）の集落が続く。この時期の住居の特徴は、ベッド状遺構と屋内土壙を持つことである。これらの施設が住居内で占める位置は棟方向に一定の関係があるとみられる。とすればＳＢ14・15・18・23の主軸方向と屋内土坑の位置から、これらの住居は半円形に並んでいることが見て取れる。さらにその中央には掘立柱建物跡が位置する。建物跡の時期は不明であるが、仮に同時期であるとすれば、中央に広場を持ちそこに倉庫としての建物跡を持つ、４～５軒からなる集落が浮かび上がって来る。近年同時期の調査例が増えその実態が明らかになりつつあり、今回の調査も集落構成のひとつを示している。

上ノ山の集落が最も発達したのが6世紀後半から7世紀前半にかけてである。砂地岡集落はその最盛期が7世紀後半であるので、それよりも1時期古い集落がこの地で営まれていた。この時期の特徴は作り付けの竈を有することにあり、近年の中村遺跡・国秀遺跡に続く内陸部の良好な竈の資料が今回の調査によって得られた。竈は住居破棄時に意図的に破壊されるのが普通であり、それに伴う祭祀行為もみてとれる。その中で竈内外に約30点の土師器・須恵器が出土したＳＢ７は特異な例と言えよう。他の住居と比較すると、竈は原形に近い形で保たれていること、突出した出土土器の多さ、手捏ね土器などの祭祀具がみられない、などの特徴が指摘できる。このことは、ＳＢ７が集落内で特別な住居であり、住居ごとの個別の祭祀とは異なる、集落内における共同祭祀の場であることを示していると考える。つまり個々の住居の枠を越えた集落全体にかかわる竈祭祀が実施されたとみてよいだろう。なお祭祀遺物として石製模造品が出土したが、中村・国秀遺跡でみられた土製模造品はみあたらない。同じ内陸部における祭祀具の違いは、時期差と地域差、そして祭祀の対象などによって異なるとみられるが、今後の資料の増加を待って検討したい。

今回の調査では、遺構遺物は少ないながらも8世紀代の銅精錬などの金属生産に関連する遺構の一部を検出することができた。律令国家直営の長登銅山が8世紀前半に操業を開始していることを考慮すれば、官営の銅生産が大規模に行われた一方で、周辺地域でも並行して、集落内での小規模な金属生産が続けられていたことを物語るものである。

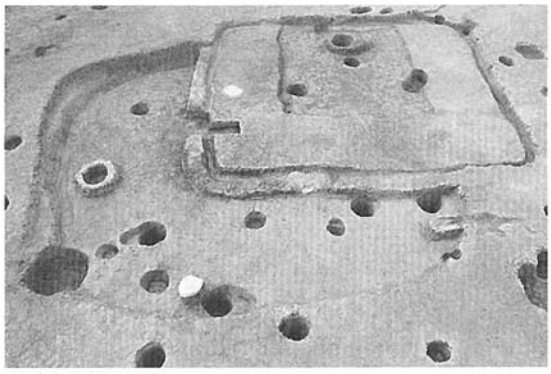
◀空から見た上ノ山遺跡

◀発見された竪穴住居跡群(1)

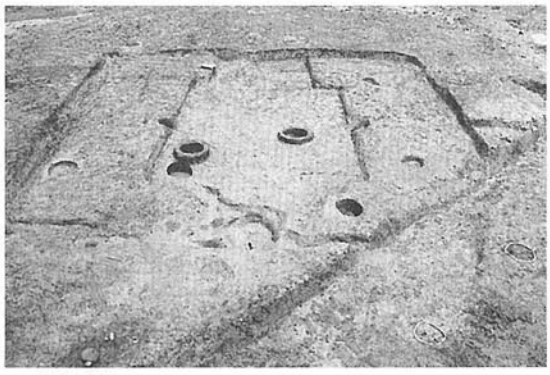
◀発見された竪穴住居跡群(2)

図版 2

▲SB 5・6

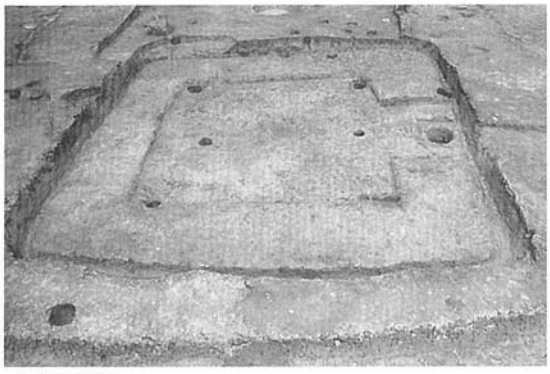


▲SB19・20

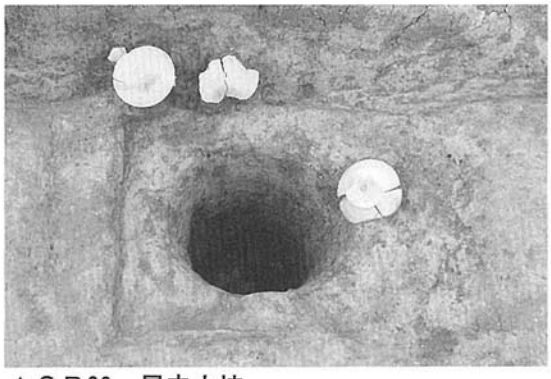


▲SB14

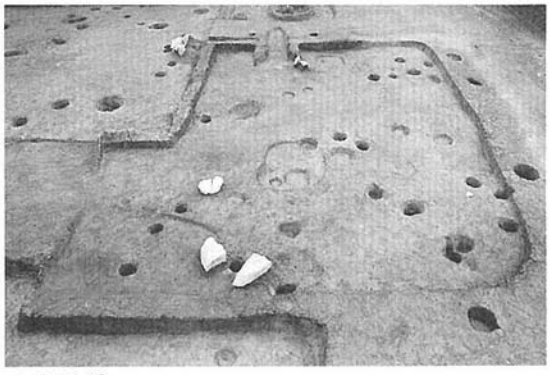
▲SB17・18



▲SB23



▲SB23　屋内土坑



▲SB10

▲SB 9

▲ＳＢ７

▲ＳＢ７　竈

▲ＳＢ７　竈

▲ＳＢ７　竈完掘

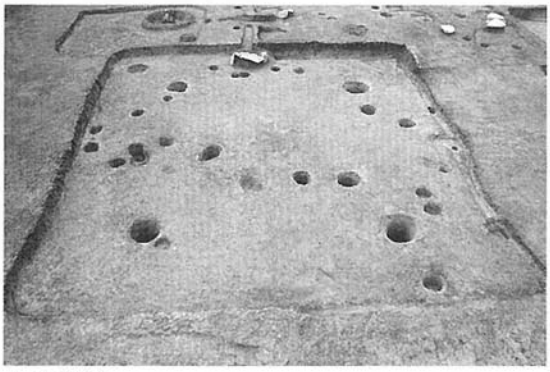
▲ＳＢ７　竈内出土土器

▲ＳＢ７　竈周辺の土器群（Ａ群）

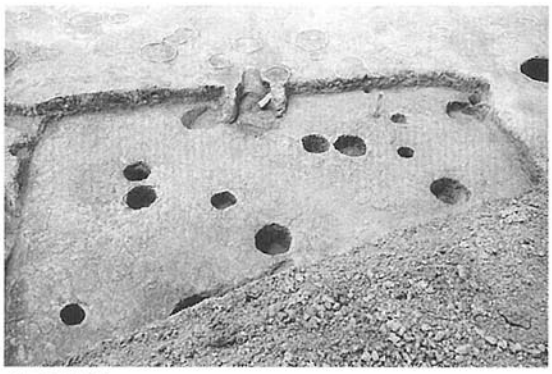
▲ＳＢ７　竈周辺の土器群（Ｂ群）

▲ＳＢ７　竈周辺の土器群（Ｃ群）

図版 4

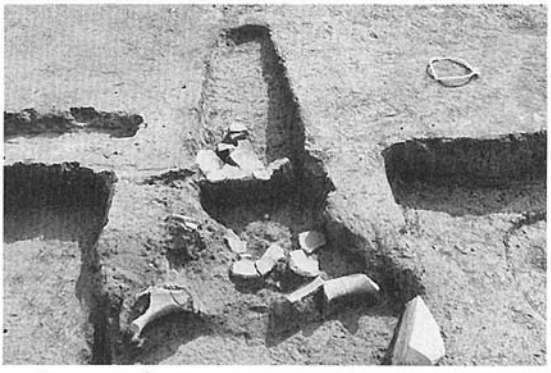


▲ＳＢ11



▲ＳＢ17

▲ＳＢ16　竈

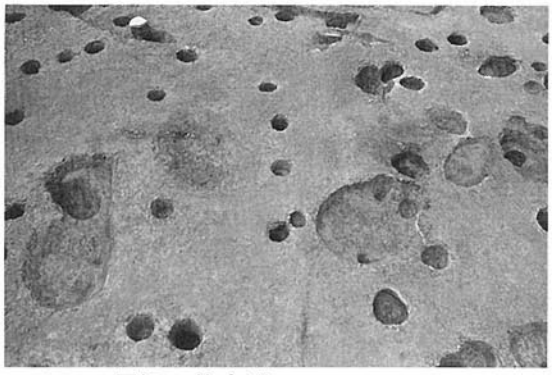


▲ＳＢ10　竈

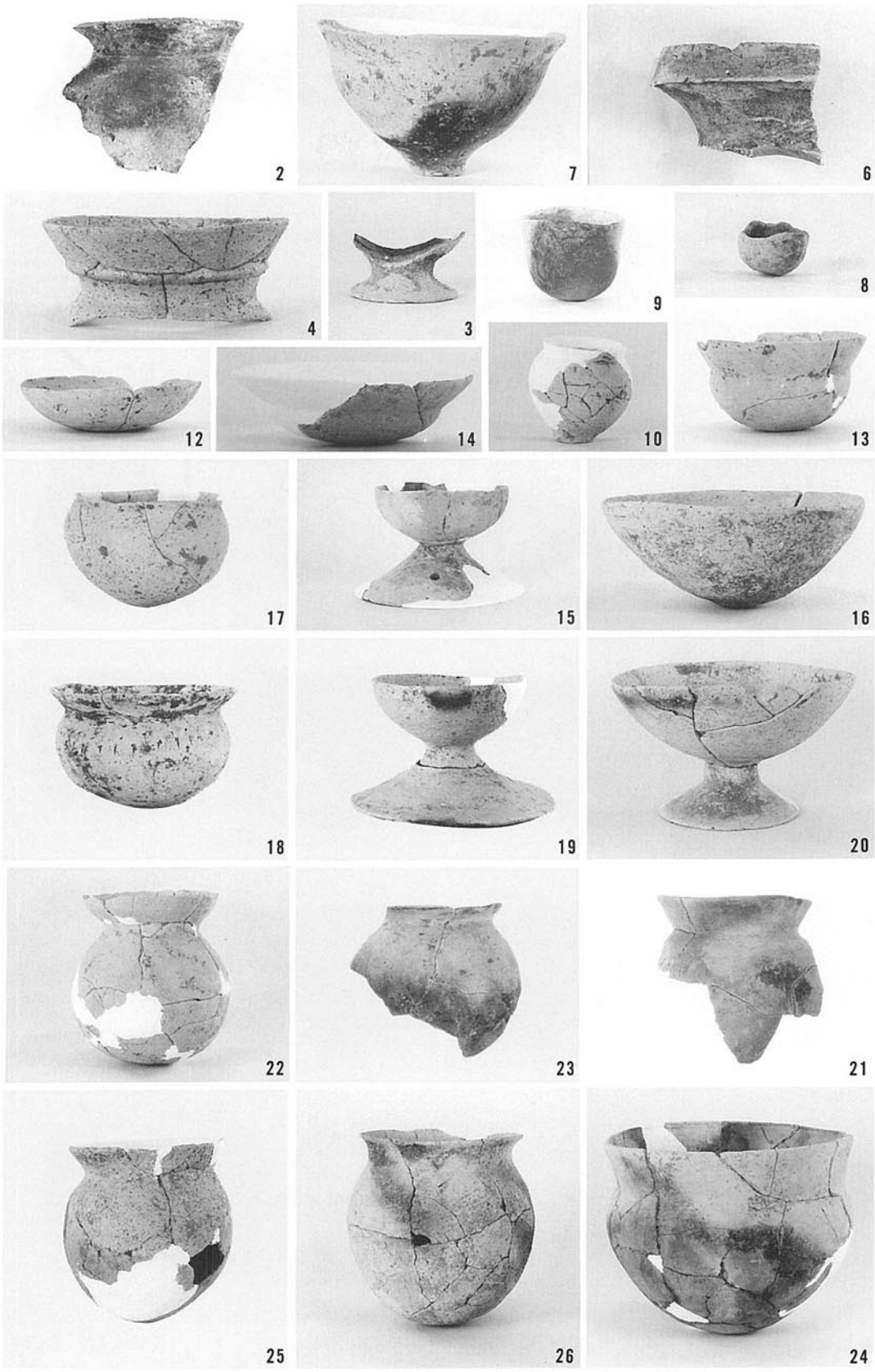
▲ＳＢ11　竈

▲ＳＢ９　竈

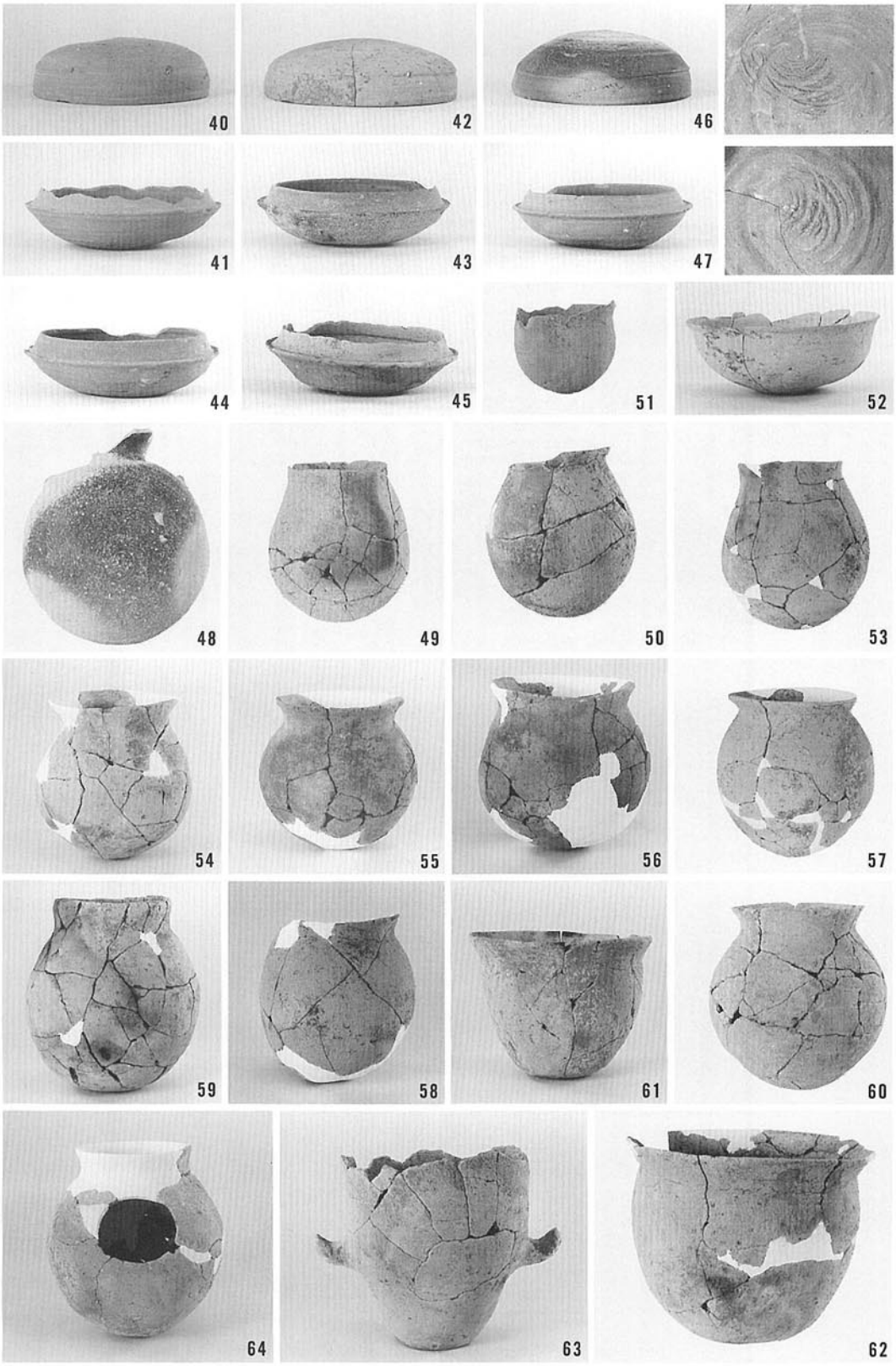
▲ＳＢ24　竈



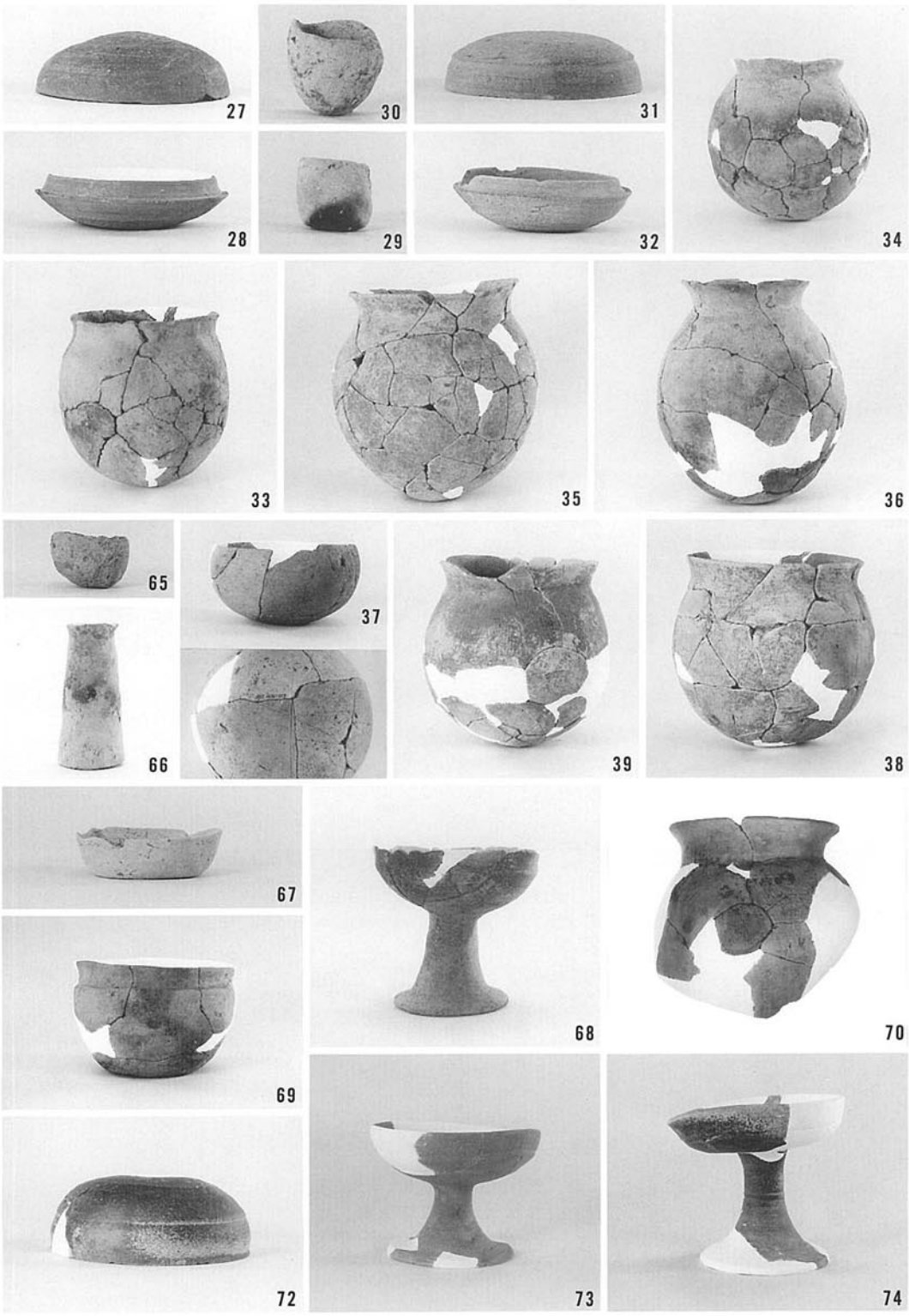
▲ＳＸ１周辺の柱穴群



2　SB5　3・4　SB19　6・7　SB20　8～24　SB23　▲出土遺物(1)



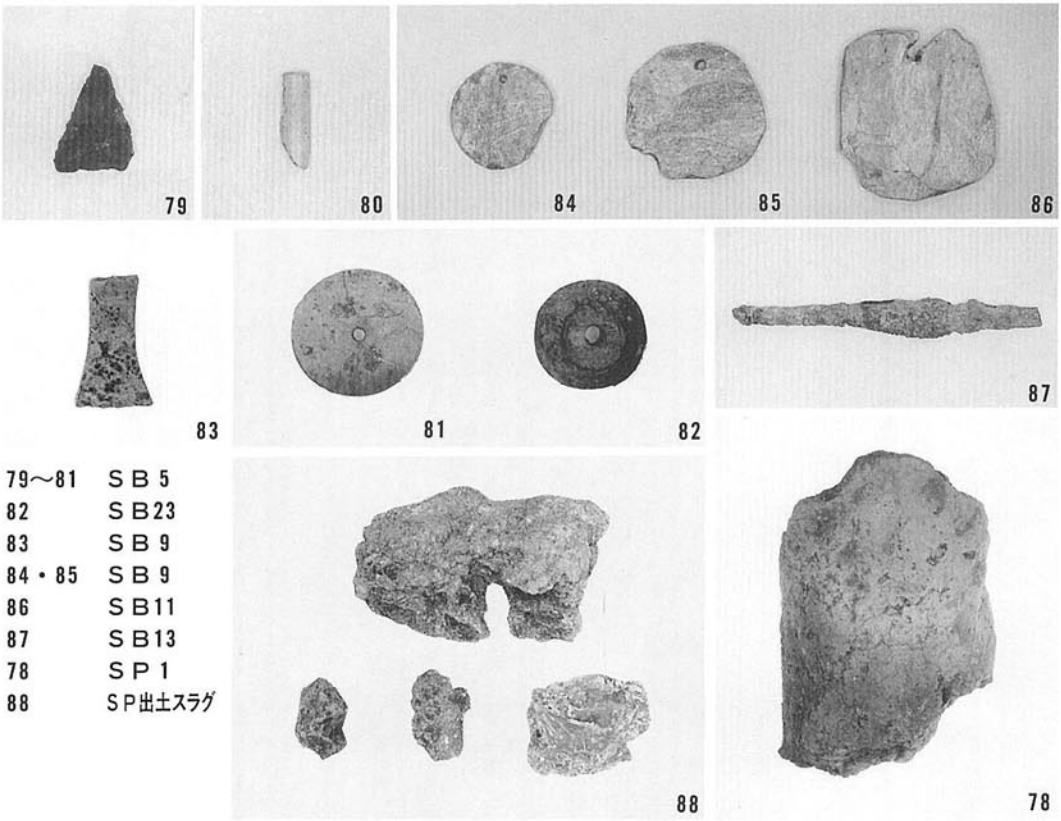
▲出土遺物(2)　　40～62　ＳＢ7



27・28　ＳＢ16　29～36　ＳＢ９　37～39　ＳＢ10
65・66　ＳＢ24　67～70　ＳＢ11　72～74　ＳＢ21

▲出土遺物(3)

図版 8



79～81	ＳＢ５
82	ＳＢ23
83	ＳＢ９
84・85	ＳＢ９
86	ＳＢ11
87	ＳＢ13
78	ＳＰ１
88	ＳＰ出土スラグ

▲出土遺物(4)

山口県埋蔵文化財調査報告第168集

上ノ山遺跡

１９９４年　３月

編集　財団法人山口県教育財団
　　山口県埋蔵文化財センター
発行　財団法人山口県教育財団
　　山口県教育委員会
印刷　大村印刷株式会社